



## オリンピックニュースとジェンダー：日本の報道傾向と新たなコミュニケーションの構築に向けて

その他のタイトル	Gender Representation in Olympic News Coverage : Building Gender-sensitive communication on Japanese Media
著者	小林 直美
雑誌名	関西大学人権問題研究室紀要
巻	80
ページ	2-24
発行年	2020-10-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00021358">http://hdl.handle.net/10112/00021358</a>

# オリンピックニュースとジェンダー

日本の報道傾向と新たなコミュニケーションの構築に向けて

小林 直美

## 1. はじめに

2014年12月、オリンピック憲章に「性的指向による差別禁止」が加えられた。その後2016年に開催された第31回リオデジャネイロオリンピック（以下リオオリンピックと略す）では、大会テーマの1つにダイバーシティ（多様性）があげられ、難民選手団が結成され出場した。このように、今日のオリンピックでは性別や人種、国籍や出身、性的指向や宗教等をはじめとする様々なダイバーシティが重視されている。

また、リオオリンピックの特徴をジェンダーの視点からみると、女性選手の参加率は過去最高の45%に上昇し、トランスジェンダー選手の性別変更基準が緩和され、大会期間中のセクシュアル・マイノリティの選手等によるカミングアウトが史上最高にのぼった。女性選手やセクシュアル・マイノリティの選手たちの競技への参加と参加者数という点で、リオオリンピックは重要な大会であったといえよう。

同時に、オリンピックと報道を巡るメディア環境は激変している。かつて情報は新聞・テレビ・雑誌・ラジオ等のマス・メディアの「送り手」から、私たち「受け手」への一方通行であった。しかし1990年代にインターネットが普及し、「受け手」であった視聴者はパソコンを利用してインターネットにアクセスし、情報収集と発信を行うようになった。そして現在、スマートフォンの登場によって、ソーシャル・ネットワーク・サービス（以下、SNS: social networking service）を通じ私たちはより簡単に、素早く、世界に向けて情報発信することができるようになった。それはオリンピック選手の情報行動も変容させ、選手自らがSNSを通じ自ら情報発信し、そ

の内容がマス・メディアにも取り上げられるようになった。これまでマス・メディアによって「報道される側」であった選手は、情報の「送り手」となり、私たちは選手自らが発信する情報に接触し、選手と直接交流することができるようになった。

このようにオリンピックにおいて選手のジェンダーやダイバーシティが尊重され、選手自らが発信する情報に接触できるSNS時代のオリンピックニュースは、どのような報道であったのだろうか。また、SNS時代の新しい選手の表象やコミュニケーションの可能性はあるのだろうか。本研究は以上のような問題意識を持ち、日本で放送されているテレビニュースの内容分析と、テレビニュース制作者とオリンピック選手のインタビュー調査を実施し、その結果をまとめ考察を行う。

なお本稿は、既に発表した内容（小林2019; 小林2020）に加筆・修正を加えまとめたものである。

## 2. 先行研究

日本におけるメディアとジェンダー研究の多くは、マス・メディアが男性中心の組織であるため女性の視点が排除され、ステレオタイプな女性性を再生産しているという問題意識のもと、リベラルフェミニズムの立場から行われてきた。マス・メディアは受け手に規範的な女性像を提示し、ジェンダー構築に大きな影響を与えているとされている。特に主流メディアは当該社会の支配的価値を反映した情報を流通させる傾向にあるため、権力を握る男性の価値観に沿った情報を流布するイデオロギー装置であるというものであった（たとえば小玉1989）。上記のメディアにおける女性研究について松田は、メディア内容の分析とメディアの担い手分析に終始しているとし、ジェンダーを社会的に構成していくメカニズムに焦点をあてるべきであると述べている（松田1996）。

そして、フェミニズムからジェンダーへと研究が発展していく中で、バトラーは「女性」というカテゴリーを使用しながら性別二元論を批判し

(Butler1991=1999)、ポストモダンフェミニズム、ブラックフェミニズムやクィアフェミニズム等では「女性」についてそれぞれ異なる認識を示し、第三世界出身の研究者たちは「女性」内部の分断を明らかにした。これらの研究では、「セックス」と「ジェンダー」という概念の接合である「女性」がそれぞれの立場から異なるため、一括りに「女性」とカテゴライズすることの再考を促した。さらにジェンダー分析時に性別とは別の差異（たとえば人種やエスニシティ、セクシュアリティ、年齢、階級、障害）とのインターセクショナルリティ（Crenshaw1989）に配慮するアプローチの導入に繋がった。

一方、メディアにおけるスポーツとジェンダー問題については、近年Bruceがカルチュラル・スタディーズと第三波フェミニズムの視点からスポーツする女性とメディア表象に関し15のルールを精製した。それは大きく伝統的メディア報道にみるルールと、ソーシャルメディアにみるルールの2つに分類することができる。前者は「美か力強さか」という二者択一の表象であり、男女の差異に着目した古く・根強い9つのルール、男女の類似性を強調する4つの現行ルールから構成されている。後者は「美しくかつ強い」という新時代の新しい2つのルールから構成されている（Bruce 2015）。

日本のオリンピック報道における女性選手の表象については、性別による報道量や取り上げられる競技の差異（飯田2007；藤山2016；山本ほか2016）、選手の身体規範や性的対象化、性別役割分業に関する表象（阿部2008；飯田2003；平川2009；田中2012）等がある。またテーマ別に開会式（登丸2010）、ナショナルイズム（阿部2008）、送り手調査（飯田2008；小林2019）、オーディエンス調査（飯田2005）、選手へのインタビュー調査（小林2019）等があげられる。これらの研究は女性選手の報道量、文脈や映像表象が男性選手と異なり不平等であること、美しさや年齢が注目され女性選手が矮小化した扱いを受け、性の対象とされていること、身体に関する規範を明らかにした。Bruceによるスポーツする女性とメディア表象15個

のルールと日本の研究結果を比較すると、日本では男女の差異に着目した古く、根強いルールが残っており、欧米の報道内容とは異なる状況が伺える。

本章ではジェンダーとメディア研究の発展を振り返り、スポーツする女性のメディア表象研究が発展していることを述べた。次章では本研究の目的と手法について述べる。

### 3. 研究目的と手法

本章では、本研究の目的と手法について述べる。

#### 3.1 研究目的

本研究の目的は、第一にリオオリンピック報道におけるジェンダー・ダイバーシティ表象の傾向を明らかにすること。第二に、日本の報道傾向についてメディア制作者とオリンピック選手のインタビュー調査から考察を行うこと。第三に、日本の報道傾向をふまえ、新たなジェンダー・ダイバーシティ表象やコミュニケーションのあり方についてまとめを行う。

#### 3.2 研究の手法、対象番組・期間

本研究は2つの調査から構成されており、1つ目はテレビニュースの内容分析である。対象番組は、日本放送協会の『ニュースウオッチ9』と、日本テレビ放送網の『NEWS ZERO』である。調査期間は、リオオリンピック開催4日前の2016年8月1日から、オリンピック終了4日後の8月25日までである。この2番組を研究対象とした理由は、第一に公共放送と民間放送であること、第二に放送時間が概ね同じであるためである。本研究はリオオリンピックの内容分析基礎項目の内、オリンピックニュースとして「ニュースの分野②」（以下、スポーツニュースとする）に該当したニュースを分析したものである。また、本研究の分析単位は「報道回数」である。「報道回数」とは、1本のニュースの中で主だった選手をカウントしたものである。ただし、1本のニュースで複数のオリンピック競技結果が取

り上げられた場合（「ミックス」に該当）は、それぞれの競技結果で最も注目された選手をコーディングした。分析項目は表1のとおりである。

コーディングを担当したコーダーは、筆者が所属していた大学の学生2名である。分析にあたり、コーディング・マニュアルに基づき、1番組につき1人のコーダーがコーディングを行った。コーダーは事前に十分なトレーニングを積み、本研究のコーディングにあたった。最終的にすべてのデータは筆者が見直し、修正を行いデータの一致度と信頼性を高めるよう努めた。

表1 リオオリンピック テレビニュース分析項目

内容分析基礎項目（9項目）	ジェンダー分析項目（10項目）
a 日付	a 選手の名前
b 放送局コード	b 性別
c 分/秒	c 国籍
d ニュース時間	d 競技結果
e タイトルテロップ/サブタイトルテロップ	e 選手のプライバシー
f ニュースの発生地	f 選手の容姿
g ニュースの分野①	g 選手の感情・表情
h ニュースの分野②	h 選手のジェンダー
i 備考	i 選手の呼称
	j 選手の性的対象化

2つ目はインタビュー調査である。調査対象は、①リオオリンピックのテレビニュース制作者（ディレクター3名（女性1名、男性2名）、②リオオリンピック参加選手（3名（女性1名、男性2名））である。調査は対面式または電話によるインタビューで行い、調査は2018年11月13日～2019年2月13日に実施した。調査対象者のジェンダーやダイバーシティへの理解度、あるいはテレビニュースの担当によって質問内容を追加・変更することができる半構造化インタビューを実施した。

なお、本研究で用いた手法の詳細については調査報告書（小林2019）を参照されたい。また、本研究は国際テレビニュース研究会考案による内容分析の手法を用いているが（中・日吉・小林2020）、調査対象番組数や内容分析基礎項目で変更点がある。このため内容分析基礎項目の結果が一致しない場合があることをお断りしておく。

#### 4. 調査結果

本章ではリオオリンピック報道のジェンダー内容分析結果と、インタビュー調査結果について述べる。

##### 4.1 ニュース本数とニュース時間

表2は『ニュースウオッチ9』（343本）と『NWES ZERO』（351本）が調査期間中に提供した総ニュース本数と総ニュース時間及びそれぞれの平均を示したものである。同じ60分番組であるが、『NWES ZERO』は分析期間中に同番組の時間帯にリオオリンピックの試合中継があったため放送が3日少ない。そこでニュース時間をニュース本数で割り、ニュース1本あたりの平均ニュース時間を求めたところ、『ニュースウオッチ9』は202.1秒/本、『NWES ZERO』は128.7秒/本であった。『ニュースウオッチ9』の方が『NWES ZERO』よりも1本あたりのニュースが長い傾向にある。

表2 分析日数と報道量

	分析日数	ニュース本数	ニュース時間	平均ニュース時間
『ニュースウオッチ9』	19日	343本	69,320秒	202.1秒/本
『NWES ZERO』	16日	351本	45,159秒	128.7秒/本
合計	35日	694本	114,479秒	
平均	17.5日	347本	57,239.5秒	165.4秒/本

## 4.2 報道された選手の「性別」と「国籍」

スポーツニュースで取り上げられた選手を、2番組で合計し「性別」と「国籍」でクロス集計したものが図1である。リオオリンピック開催期間中のスポーツニュースでは、全体の約9割（89.6%）が日本人選手の報道で占められ、そのうち日本の男性選手が196回（49.0%）、次いで日本の女性選手が161回（40.3%）であった。日本以外の選手は合計で42回（10.5%）（女性選手22回（5.5%）、男性選手18回（4.5%）、混合2回（0.5%））、セクシュアル・マイノリティの選手の報道は国籍を問わず0回であった。

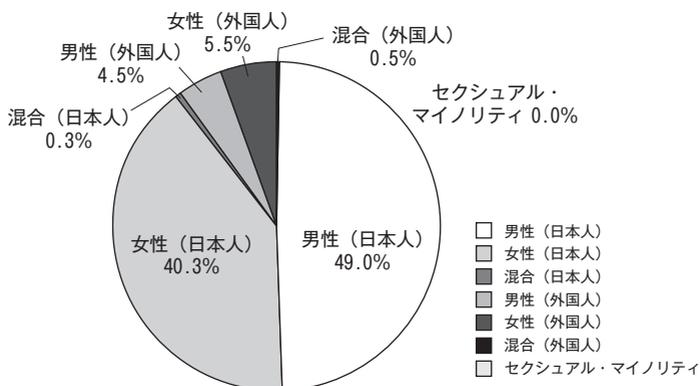


図1 選手の性別×国籍 単位：報道回数（2番組合計）

## 4.3 報道された「競技」と「性別」

表3は、スポーツニュースで取り上げられたオリンピック競技の報道回数と、当該ニュースで取り上げられた選手の「性別」を百分率で示したものである。全体的傾向として女性選手45.6%、男性選手53.6%、混合0.8%、セクシュアル・マイノリティの選手0.0%であった。

表3 報道された「競技」×「性別」 単位：報道回数（2番組合計）

競技名	女性	男性	セクシュアル・マイノリティ	混合	日本のメダル獲得数	
					女性	男性
901（開閉会式）	0.8%	1.3%	0.0%	0.0%		
902（その他）	3.8%	3.8%	0.0%	0.8%		
903（ミックス）	13.5%	15.0%	0.0%	0.0%		
904（陸上競技）	1.0%	5.5%	0.0%	0.0%		銀1、銅1
905（水泳）	5.0%	6.0%	0.0%	0.0%	金1、銅3	金1、銀2、銅2
906（サッカー）	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%		
907（テニス）	0.0%	2.0%	0.0%	0.0%		銅1
908（ボート）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
909（ホッケー）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
910（ボクシング）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
911（バレーボール）	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%		
912（体操）	0.8%	5.8%	0.0%	0.0%		金2、銅1
913（バスケットボール）	0.8%	0.3%	0.0%	0.0%		
914（レスリング）	5.0%	1.0%	0.0%	0.0%	金4、銀1	銀2
915（セーリング）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
916（ウエイトリフティング）	0.5%	0.3%	0.0%	0.0%	銅1	
917（ハンドボール）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
918（自転車）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
919（卓球）	4.8%	3.3%	0.0%	0.0%	銅1	銀1、銅1
920（馬術）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
921（フェンシング）	0.0%	0.3%	0.0%	0.0%		
922（柔道）	3.0%	4.5%	0.0%	0.0%	金1、銅4	金2、銀1、銅4
923（バドミントン）	5.8%	0.0%	0.0%	0.0%	銅2	
925（射撃）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
926（近代五種）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
927（カヌー）	0.0%	0.3%	0.0%	0.0%		銅1
928（アーチェリー）	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%		
930（トライアスロン）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
931（テコンドー）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
932（ラグビー）	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%		
933（ゴルフ）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
合計	45.6%	53.6%	0.0%	0.8%	金7、銀1、銅10	金5、銀7、銅11

報道の多い競技トップ5をみると、女性選手1位は「ミックス」（13.5%）、2位「バドミントン」（5.8%）3位「水泳」（5.0%）「レスリング」（5.0%）、5位「卓球」（4.8%）であった。男性選手の1位は「ミック

ス」(15.0%)、2位「水泳」(6.0%)、3位「体操」(5.8%)、4位「陸上」(5.5%)、5位「柔道」(4.5%)であった。今回、複数の競技結果を続けて取り上げたニュースは1つのニュースとして分類したため男女双方で「ミックス」が多くなったが、「ミックス」以外は、日本人のメダル獲得競技が報道回数上位を占めていることが明らかとなった。

#### 4.4 報道回数トップ10と選手の「性別」

図2、3は報道回数トップ10を選手の「性別」で示したものである。女性選手は全員メダリストで占められ、そのうち金メダリストは「伊調馨」「田知本遥」「金藤理絵」「高橋礼華」「松友美佐紀」の5選手であった。男性選手はトップ10のうち金メダリストの「萩野公介」選手を筆頭に、「内村航平」、「バイカー茉秋」、「白井健三」の4選手であった。

報道回数トップ10のみの報道回数は女性選手83回、男性選手96回で男性選手の方が多く報道されていた。その他の特徴として、男女とも全員が日本人であったことがあげられる。

女性選手の金メダリスト以外の5人の内訳をみると、卓球3選手（「福原愛」「石川佳純」「伊藤美誠」）、バドミントン1選手（「奥原希望」）で、レスリング1選手（「吉田沙保里」）であった。男性選手トップ10の銀・銅メダリストをみると、「水谷隼」選手はシングルスで日本人男女初のメダルを獲得し、男子団体でも銀メダルを獲得した。「錦織圭」選手はプロテニスプレイヤーであり、元々注目度が高い上に銅メダルを獲得した。「瀬戸大也」選手は、400m個人リレーで1位となった萩野公介選手と一緒に出場し、銅メダルを獲得した。「ケンブリッジ飛鳥」選手は男子100mと男子4×100mリレーに出場し、リレーで銀メダルを獲得した。メダル獲得のない「7人制ラグビー男子日本代表」は、初戦で強豪のニュージーランドを破り歴史的な大勝利と評され、続くフランス戦も勝利し、メダル獲得が期待されたため報道回数8位になったことが推測される。「サッカー男子日本代表」は、プロスポーツとして人気がある競技であり元々注目度が高

いことから8位に入ったと思われる。

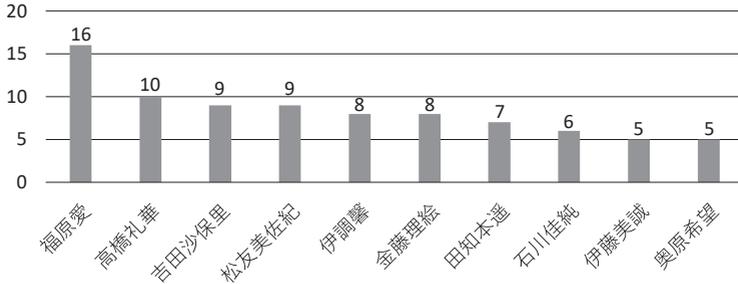


図2 女性選手の報道回数トップ10

単位：報道回数（2番組合計）

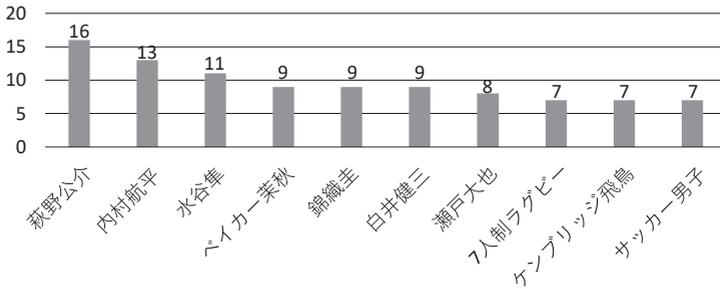


図3 男性選手の報道回数トップ10

単位：報道回数（2番組合計）

以上を勘案すると、「卓球」の女性選手3名（「福原愛」「石川佳純」「伊藤美誠」と、「バドミントン」1選手（「奥原希望」）、陸上の「ケンブリッジ飛鳥」選手は、メダル獲得数と順位を考慮すると報道量が比較的多いといえよう。

#### 4.5 報道された選手の「呼称」と「選手名」

ニュース内で提示された選手やチームに対する正式名称以外の「呼称」

について「性別」毎に百分率でまとめたところ、女性選手が46.0%、男性選手は53.3%、混合0.8%、セクシュアル・マイノリティの選手への言及は全くなかった。男性選手の方がニックネーム等で多く呼ばれることが多いことが明らかとなった。

具体的にどの選手がどのように呼ばれているか調べるために、選手の「呼称」のトップ5を示したものが表4である。女性選手の呼称の第1の特徴は、すべて日本人メダリストで占められていることである。また、卓球とバドミントンの選手で1位3位4位を占めていることが第2の特徴である。また第3の特徴としてオリンピックに連続出場している強豪選手が多い。福原選手は北京から3大会、吉田選手はアテネから4大会、石川、松本選

表4 選手の「呼称」×「選手名」×「性別」（2番組合計）

順位	女性選手名	呼称	順位	男性選手名	呼称
1位	福原 愛 (卓球)	泣き虫・愛ちゃん 最年長としてキャプ テンとして キャプ テン福原	1位	マイケル・ フェルプス (水泳)	(水の) 怪物 憧れのヒーロー 王者
	14回			13回	
2位	吉田沙保里 (レスリング)	絶対女王 霊長類最強 HERO 沙保里 さおちゃん	2位	内村航平 (体操)	航平さん／航ちゃん 夫 王者
	13回			10回	
3位	バドミントン ダブルス女子 日本代表 高橋礼華・ 松友美佐紀	タカマツ (ペア)	3位	白井健三 (体操)	ひねり王子／びびり王子 世界チャンピオン王者 航平さんの後継者
	7回			8回	
4位	石川佳純 (卓球)	愛ちゃん2世 佳純ちゃん エース石川 (佳純) 卓球3姉妹の二女	3位	水谷隼 (卓球)	エース／エース水谷／ 大きなエース／ 日本男子のエース (水谷)
	7回			8回	
5位	松本 薫 (柔道)	野獣	5位	陸上400m リレー男子 日本代表 (陸上)	日本の侍たち “史上最速”の4人 史上最強
	5回			5回	

手はロンドン、リオの2大会連続出場しており、全員がメダル獲得者である。つまり、注目度が高い強豪選手が正式名称以外の「呼称」で呼ばれる傾向にある。第5の特徴は、「○○ちゃん」等の子ども扱いがみられること。第6の特徴は格闘系競技に出場する女性選手の呼称が「霊長類最強」(吉田選手)、「野獣」(松本選手)等の動物にたとえられることである。

男性選手をみてみると、競泳のマイケル・フェルプス選手が日本人以外で唯一トップ5入りしている。フェルプス選手はシドニーオリンピックから5大会連続出場し、個人・団体に金メダル23個、銀メダル3個、銅メダル2個の合計28個のメダルを獲得している世界一の競泳選手である。また内村選手は北京から3大会連続出場し、個人総合2連覇を含む合計7個(金メダル3個、銀メダル4個)のメダルを獲得している。白井選手もオリンピック前の競技結果から注目度の高い選手であった。また、「王者」「エース」「チャンピオン」「史上最速」「(水の)怪物」等選手個人の実績や技量にちなんだ「呼称」が目立つ。また内村選手のみ「航ちゃん」と呼ばれており、子ども扱いが認められた。

上記から、男性選手の「呼称」の特徴は、第1に注目度の高い強豪選手が愛称をつけられやすいこと、第2に選手個人の実績や技量に由来する「呼称」が多いといえよう。

#### 4.6 報道された選手の「プライバシー」と「性別」

図4は選手の「プライバシー」についてニュース内で言及された内容を項目ごとに「性別」でクロス集計したものである。全体として選手の「過去や未来」(n=81)「性格」(n=41)「その他」(n=49)への言及が多く、選手の関係者への言及は少なく、「恋愛」への言及は全くなかった。また、セクシュアル・マイノリティ、混合への言及はなかった。

男女同程度取り上げられた「プライバシー」は、「過去や未来」(女性50.6%、男性49.4%)、「子ども」(女性50.0%、男性50.0%)、「コーチ・監督」(女性50.0%、男性50.0%)である。女性選手の方が取り上げられること

が多い項目は「親・兄弟姉妹」(71.9%)、男性選手の方が取り上げられることが多い項目は「結婚」(100.0%)、「パートナー」(83.3%)、「友人」(81.8%)、「恩師」(60.0%)、「その他」(57.1%)、「性格」(56.1%)、「同僚」(53.8%)であった。ただし、「過去や未来」以外の項目はサンプル数が少ないため、質的分析が必要である。

以上から、選手の「プライバシー」は、「過去や未来」、「監督・コーチ」等選手の背景がわかる項目について男女同程度言及されるが、女性選手は「親・兄弟姉妹」、男性選手は幅広い関係者が多く取り上げられる傾向にあることが明らかとなった。

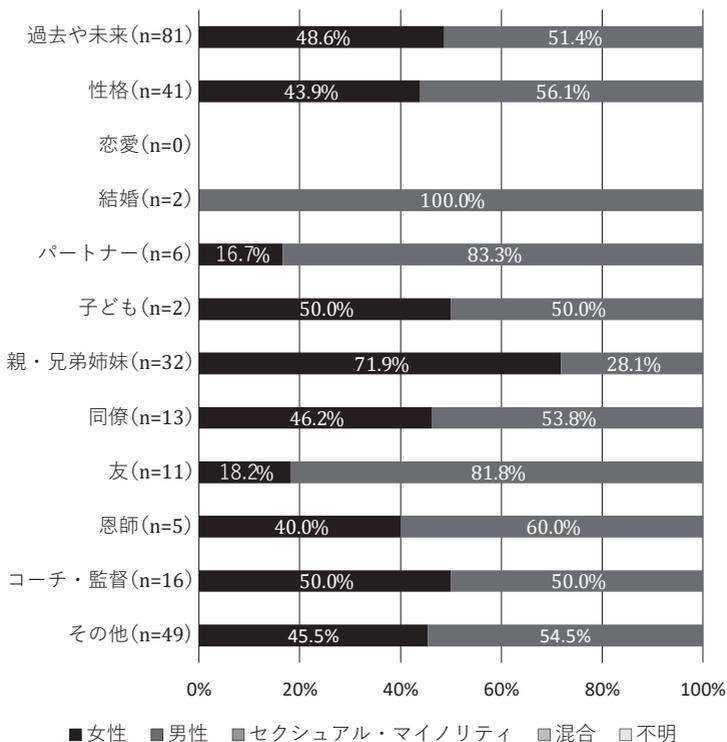


図4 選手の「プライバシー」×「性別」 単位：報道回数（2番組合計）

#### 4.7 報道された選手の「容姿」と「性別」

図5は選手の「美しさ」「力強さ」「その他」に代表される「容姿」についてニュース内で提示された内容を項目ごとに「性別」でクロス集計した結果を百分率で示したものである。全体傾向として各選手の「美しさ」(n=28)についての提示は少なく、「力強さ」(n=121)の方が多く「混合」「セクシュアル・マイノリティ」への言及はなかった。各項目をみていくと「美しさ」については男性選手が76.5%と多く取り上げられていた。また、「力強さ」は女性選手が62.0%と多く取り上げられていた。

上記から、「容姿」については「美しさ」よりも「力強さ」の表現が多く、女性選手の「力強さ」について多く取り上げられる傾向が明らかとなった。

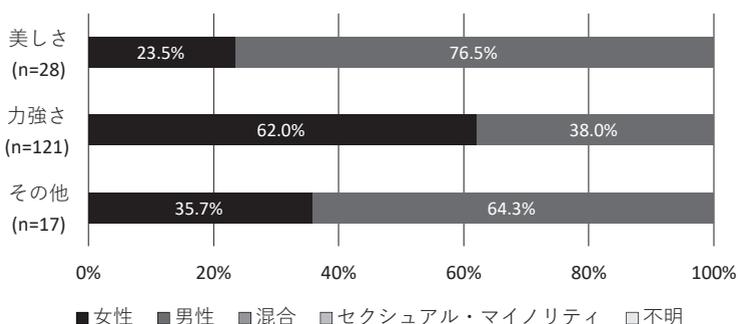


図5 選手の「容姿」×「性別」 単位：報道回数（2番組合計）

#### 4.8 報道された選手の「感情・表情」と「性別」

図6は選手の「感情・表情」についてニュース内で提示された内容を項目ごとに「性別」でクロス集計した結果を百分率で示したものである。全体傾向として選手の「喜び」(n=245)や「気迫」(n=112)をニュースで取り上げることが多いことが明らかとなった。

「性別」でみてみると、セクシュアル・マイノリティを取り上げることは

なく、女性選手は「悲しみ」(75.6%)、「緊張」(73.3%)、「怒り」(61.8%)とどちらかといえばネガティブな「感情・表情」をニュースで取り上げられることが多い。男性選手は「気迫」(61.8%)、「喜び」(58.0%)、「リラックス」(58.8%)について女性選手よりも多く提示されていた。ただし、「喜び」「気迫」以外の項目はサンプル数が少ないため、女性選手はネガティブな表情を取り上げられることが多いと断定することは早急であり、質的分析を行う必要がある。

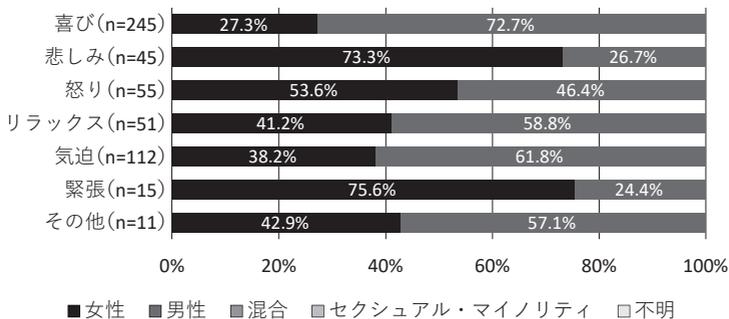


図6 選手の「感情・表情」×「性別」 単位：報道回数（2番組合計）

#### 4.9 インタビュー調査結果

本節では、リオオリンピック報道に従事したテレビニュース制作者3名（女性1名、男性2名）と、同オリンピックに出場した選手3名（女性1名、男性2名）に対するインタビュー結果の概要を述べる。

##### ① テレビニュース制作者

テレビニュースの制作者に対しては、オリンピックニュースの報道方針、放送順位、ニュース制作・取材体制、ジェンダーやダイバーシティに関する考えと選手の取り上げ方、SNSの活用について質問をした。

リオオリンピックの報道方針は、「日本の競技優先」「日本人がメダルを

取ったら最優先」ということで3名中2名が述べていた。また、分析対象である夜のニュース番組の場合、放送当日午後にはどの競技をどれくらいの時間取り上げるかほぼ決定しており、それらについての最終決定権は東京にいる番組のトップが持っていることが共通していた。放送の順番については競技や選手の「注目度」、「視聴者目線」に立って決められていた。

ニュースにおける選手の取り上げ方については、性別による違いはないというのが3者共通の考えであった。またニュースの焦点は制作者毎に異なっていた。たとえば強豪選手の敗退や、注目選手の「象徴的場面」を切り取ることに注力する制作者や、性別の違いよりも視聴者に興味をもってもらう「背景を探る作り方」を心がける者、競技の特徴や競技スピードによって撮影方法等を変え、選手を「かっこよく撮る」ことを大切にする制作者もいた。選手を愛称で呼ぶ報道については、個人の選手については使わない一方で、団体競技では使うという制作者がいた。

一方、リオオリンピックでセクシュアル・マイノリティのカミングアウトが史上最多であったことについて、3名全員が「知らなかった」と述べた。しかし、難民選手団の参加やブラジルのファベラ出身の選手が金メダルを獲得したニュースを取り上げた者や、ブラジルの多様性やボランティアの活躍をニュースで取り上げた者がいた。ある制作者は、「日本人の選手がカミングアウトしていたら必ず取り上げたと思う」と述べた。

SNSの活用については、リオオリンピック当時は現在ほどインターネット報道の担当や部局が整備されておらず人手も足りなかったと述べている。インタビューした2019年は、リオオリンピックの時よりもスポーツ報道とSNSの連携が発展しており、SNSのオリジナルコンテンツも増えた。しかしながら、サービスは増えても人手が増えないことが悩みだと述べた。

## ② オリンピック選手

リオオリンピックに出場した選手には、SNSの活用、性別によるマス・メディアの取り上げられ方の相違について、マス・メディア期待すること

について質問を行った。日本代表選手は、JOCや所属団体からSNSによる情報発信を推奨されている。しかし、インタビュー調査対象となった選手は、全員が情報発信に慎重であった。慎重となった原因は自らの意図と異なる情報や誤った情報をマス・メディアによって報道された経験や、SNSで批判的コメントを受けた経験によるものであった。また、そのようなことがあるからこそ、選手はSNSを利用して自分の言葉で意見を表明することが必要であると考えている選手もいた。

性別毎のマス・メディアによる取り上げられ方の相違については、男性選手が競技するイメージの強い競技は、女性選手が取り上げられる傾向にあると感じている選手がいた。その他には、「かわいい」女性選手がそれだけで取り上げられ、取り上げられ方と自らの競技レベルの乖離に悩んだ選手の例があげられた。さらに、女性が競技しないイメージの種目が、オリンピック競技となることで社会やマス・メディアの見る目が変わったことを感じた選手もいた。

マス・メディアに対する要望として、オリンピック開催の有無に関わらず広く、長くスポーツを取り上げること、選手の正しい意図を正確に伝えてほしいこと、活躍した選手はそれに応じた取り上げ方をしてほしいこと、女性選手がキャリアの中で結婚し子育てする際の、性別によらない役割分担や新しい家族のあり方を伝えてほしいという要望が語られた。

## 5. まとめと考察

本章ではリオオリンピック開催期間中のテレビニュースで取り上げられた選手のジェンダー表象について、分析結果をまとめ、インタビュー調査の結果をふまえて考察を行う。

### 5.1 まとめ

リオオリンピック開催期間中のテレビニュースは、女性選手の報道が4割まで増加したが、メダルを獲得した日本人選手の報道で席卷され、他国

の選手の活躍やセクシュアル・マイノリティの選手の存在は周縁化された。その要因は日本人のメダル至上主義の報道方針が存在したためである（小林2019：26）。このためメダルが獲得できなかったために1本のニュースとして取り上げられなかった競技は28項目中12項目に及んだ。リオオリンピックは50名以上の選手がセクシュアル・マイノリティであることを表明したことをネットニュース（『ハフィントンポスト』2016. 11.21）や他の番組では伝えていた。性的志向のダイバーシティ（多様性）を報道で取り上げるといふ点は、メディアや番組によって方針が異なるようである。

また、報道回数の多い選手はもともとメダル獲得が期待される、あるいはプロスポーツとして人気の高い競技である場合が多いが、順位やメダル獲得数に比して多く取り上げられていた選手やチームが存在した。テレビニュースは視聴者に興味や関心を持ってもらうために「背景を探る作り方」や、あらかじめストーリーを作りそれに沿った画や言葉を選手にあてはめようとしている場合があり、そのようなストーリーは、視聴者に「感動」の準備をさせるために作っていると指摘されている（森田2016：30-31）。人々を感動させるため、あるいは人々の興味・関心を引くストーリーを作る際に選手のジェンダー表象が利用されているのではないだろうか。

たとえば女性選手は「親・兄弟姉妹」にまつわる話が多く取り上げられる。これは家族という存在に支えられる女性選手という感動のストーリーを作ることにつながっている可能性も示唆される。また、選手の「感情・表情」の中でも勝利の瞬間を切り取る「喜び」や、「気迫」を中心とした画作りは男女双方に見られた。今回、女性選手は試合に負けて泣いている「悲しみ」や「怒り」といったどちらかといえばネガティブな「感情・表情」が多く取り上げられていた。これは報道回数の多い福原愛選手や吉田沙保里選手、松本薫選手が試合に負けた影響もあると思われる。他の大会との比較や個別の選手に注目した質的調査をしなければならぬだろう。

強豪選手は技量や実績にちなんだ「呼称」がつけられるが、女性選手には子ども扱いの「○○ちゃん」「××娘」という「呼称」が認められた。一

流の女性選手を子ども扱いするジェンダー・バイアスが残っている一方で、男性選手には「△△王子」のようなアイドルのような呼称や「□□ちゃん」という子ども扱いも見受けられた。今後は男女双方の呼称について注意を払わなければならないだろう。

さらに女性選手のスポーツする身体の「力強さ」への言及については、女性選手の身体や能力への称賛と捉えることは安易である。それは男女の性別による競技のすみわけ（性別分業）や、顔や体に傷がつくことへの配慮や、美しさを重視する競技に女性の性的魅力に価値をおく男性のまなざしの裏返し（飯田2018：2-8）であることが推測されるためである。リオオリンピック代表選手へのインタビュー調査によると、男性競技というイメージが強い競技を行う女性選手はメディアに多く取り上げられていると選手自身が感じていた。このような選手の表象は、スポーツにおいて男性性（速さや力強さ）の優位が保持されたジェンダー秩序の中でマス・メディアが選手のジェンダーによって人々の興味・関心をひく行為だと考えられる。

## 5.2 新しいジェンダー表象とコミュニケーションに向けて

テレビニュースの内容分析結果から、日本のオリンピックニュースが日本人のメダル至上主義の報道であり、ジェンダーやダイバーシティ表象に偏りがあることが明らかとなった。このようなテレビニュース背景には、制作者のうち正社員の8割が男性であり、契約社員・嘱託社員の6割が女性という送り手のジェンダー・バランスの偏りがある（四方2017）。選手たちの報道に対する要望の中に、女性選手の性別によらない役割分担や、新しい家族の在り方を取り上げてほしいというものがあった。制作者が事前に思い描いたストーリーではなく、女性選手のキャリア形成における結婚・子育て・家族のありようを新しい視点で取り上げることが可能なのであろうか。その実現には制作者のジェンダーによってニュース素材選択や内容の違いがある（Gill 2007, 内閣府男女共同参画局2011）ことから、女

性制作者を増やそうという立場がある。一方、ジェンダーよりも記者の個人の属性やニュースルームの雰囲気等が報道の中身やニュースの価値基準により影響を及ぼす（Chambers et al. 2004, 山田他2019）という立場がある。いずれにしても、現時点では日本の女性管理職や正社員は少ないといえよう。

海外の取組みでは、イギリスの放送局BBCがイギリスのダイバーシティ状況を放送内容に反映し提示することを目的に、視聴者や従業員、番組出演者の属性を調べ、あらゆる人を包摂する取り組みを行っている（BBC 2020）。また、ロンドンオリンピック開催時には、同国のチャンネル4で性別や肌の色、出身、障害等属性が多様な人をレポーターや制作者として雇用し、多様な視点からのニュースを届ける試みを行った。その結果、制作者の多様性と放送内容の多様性に一定の効果があつたとされる。日本でも東京オリンピックに向け、NHKで障害を持った記者の育成が行われている（山田他2019）。

テレビニュース制作者の属性が多様になり、取り上げられるニュース内容が多様になればジェンダー表象も多様になる可能性はあるだろう。しかし、テレビニュースは時間の制約があり、どうしても送り手による一方通行の情報伝達になる。そこで今日のSNSによる双方向コミュニケーションを新たなジェンダー表象や解釈に活用することができるのではないだろうか。図7は、SNS時代のジェンダー・センシティブで多様なコミュニケーションを図示したものである。オリンピックにまつわる様々な情報を選手、視聴者、オールド・メディア（テレビ・新聞等）で双方向コミュニケーションを行う中で、選手自身がジェンダーに関する多様な情報発信を行い、視聴者は選手やオールド・メディアが発信する情報の収集と受信、解釈を行うだけでなく、自らも情報発信を行い、選手やメディアと関わっていくアクティブ・オーディエンスとして行動する。オールド・メディアは、紙面や放送で取り上げられなかったジェンダーに関する情報を発信し、選手や視聴者と交流する。すべてのチャンネルでジェンダー・センシティブな

情報が行き交えば、選手のジェンダーにまつわる多様性が可視化されることだろう。

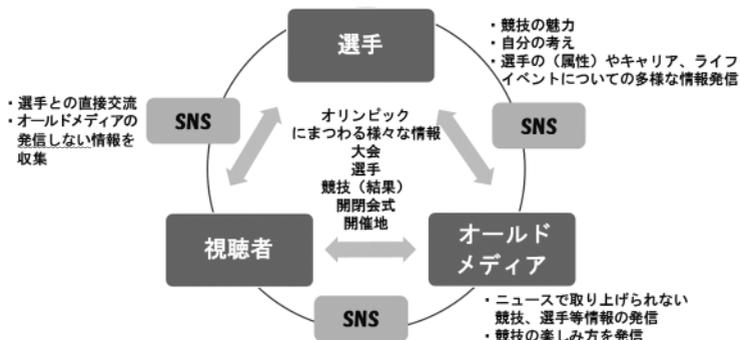


図7 SNSによるジェンダー・センシティブなコミュニケーションモデル

本稿では、リオオリンピックのテレビニュース内容分析を通じ、ジェンダーやセクシュアリティ、国籍等から選手のジェンダー表象の傾向を明らかにした。今後の課題として、女性選手・男性選手のケーススタディーを質的に行い、選手のアイドル化傾向を探ることがあげられる。また北京オリンピックやロンドンオリンピックとの比較を行い、男女の差異や類似性を時系列で分析することも必要である。さらに、視聴者のインタビュー調査を行い、ジェンダー表象を読み解くプロセスの解明をし、ジェンダー秩序がオリンピックニュースの中で構築されているのかより総合的な分析を目指す。

## 謝辞

本研究のコーディングを担当したコーダーに感謝する。また、本研究は北九州市立男女共同参画センター・ムーブによる第22回「ジェンダー問題調査・支援事業」の支援を受けて行われたものである。

## 参考文献

- 阿部潔, 2008, 『スポーツの魅惑とメディアの誘惑 身体/国家のカルチュラル・スタディーズ』世界思想社.
- Bruce, T. 2015, "New Rules for New Times: Sportswomen and Media Representaion in the Third Wave," *SEX ROLES A Journal of Research*, vol.73 (3/4) : 1-16.
- BBC, 2020, "Diversity and Inclusion," London: BBC, (Retrieved May 31, 2020, <https://www.bbc.com/diversity/>).
- Butler, J., 1991, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York: Routledge (=1999、武村和子訳、『ジェンダー・トラブルーフェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社).
- Chambers, Deborah., Steiner, Linda., and Fleming, Carole., 2004, *WOMAN AND JOURNALISM*, New York: Routledge.
- Crenshaw, K., 1989, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics," *The University of Chicago Legal Forum*, 140: 139-167.
- 藤山新, 2016, 「7スポーツメディアとジェンダー 3)スポーツメディアのまなざし」日本スポーツとジェンダー学会編、『データでみる スポーツとジェンダー』八千代出版株式会社 : 120-126.
- Gill, Rosalind, 2007, *Gender and Media*, Cambridge: Polity Press.
- 平川澄子, 2009, 「スポーツメディアにあらわれるヒロイン」『体育の科学』59, 9: 609-613.
- ハフィントンポスト編集部, 2016, 「リオ五輪で50人以上がカミングアウトしたのはなぜ? LGBTの権利向上を目指すスポーツ界」『ハフィントンポスト』(2016年11月21日) (取得日2019年11月21日, [https://www.huffingtonpost.jp/2016/11/20/olympic-and-lgbt-athletes-l\\_n\\_13117396.html](https://www.huffingtonpost.jp/2016/11/20/olympic-and-lgbt-athletes-l_n_13117396.html)).
- 飯田貴子, 2003, 「新聞報道における女性競技者のジェンダー化—菅原教子から楢崎教子へ」『スポーツとジェンダー研究』1 : 4-14.
- 飯田貴子, 2005, 「オーディエンスの多声性とジェンダー対抗的自己形成—女性競技者の新聞報道分析」『スポーツとジェンダー研究』3 : 4-17.
- 飯田貴子, 2007, 「ジェンダー視点から検証したアテネオリンピック期間中の新聞報道」『スポーツとジェンダー研究』5 : 31-44.
- 飯田貴子, 2008, 「スポーツジャーナリズムにおける『女性』の不在—デスクへの調査から見えてくるもの」『スポーツとジェンダー研究』6 : 15-29.
- 飯田貴子, 2018, 「I 基礎理論 1 スポーツとジェンダー・セクシュアリティ」飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房 : 2-3.

- 小林直美, 2017, 「ロンドンオリンピックにおける選手のジェンダー表象～テレビニュース内容分析～」『山形大学紀要, (社会科学)』第48巻第1号: 19-47.
- 小林直美, 2019, 『平成30年度ジェンダー問題調査・研究支援事業報告書 SNS時代におけるオリンピック報道～選手のダイバーシティはいかに表象されたか～』北九州市立男女共同参画センタームーブ.
- 小林直美, 2020, 「リオオリンピックニュースにおけるジェンダー ー内容分析によるジェンダー・バイアスの解明に向けてー」石原有香編著『ジェンダーと英語教育』大学出版社: 166-187.
- 小玉美意子, 1989, 『ジャーナリズムの女性観』学文社.
- 松田美佐, 1996, 「ジェンダー視点からのメディア研究再考」『マス・コミュニケーション研究』48:190-203.
- 森田博之, 2016, 「スキャンダルまみれの『東京2020』負のスパイラルから救う道はあるのか?」朝日新聞社『Journalism』7月号: 24-31.
- 内閣府男女共同参画局, 2011, 『メディアにおける女性の参画に関する調査報告書』(取得日 2020年 5月 31日, [http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/media\\_research.html](http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/media_research.html)).
- 中 正樹・日吉昭彦・小林直美, 2020, 『リオオリンピック開催期間における日本のテレビニュース報道 北京およびロンドンオリンピック開催期間におけるテレビニュース報道との比較を通して』国際テレビニュース研究会.
- 四方由美, 2017, 「日本のメディアにおける女性活躍」(取得日 2019年 11月 27日, [https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/22/8/22\\_8\\_74/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/22/8/22_8_74/_pdf/-char/ja)).
- 田中東子, 2012, 『メディア文化とジェンダーの政治学—第三波フェミニズムの視点から』世界思想社.
- 田中洋美, 2018, 「ジェンダーとメディア研究の再構築に向けて」『国際ジェンダー学会誌』vol.16: 34-46.
- 梅津迪子, 2004, 「第5節 女性スポーツの商品化」飯田貴子・井谷恵子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店: 110-117.
- 登丸あすか, 2007, 「トリノ冬季オリンピック開会式における女性の役割—テレビニュース報道の分析から」『スポーツとジェンダー研究』5:45-55.
- 登丸あすか, 2010, 「ジェンダーの視点によるオリンピック開会式分析—メディアのガイドラインに照らして」『文京学院大学人間学部研究紀要』12:141-150.
- 山田潔他, 2019, 「シンポジウム共生社会実現と放送の役割～東京2020パラリンピックをきっかけに～」『放送研究と調査』9月号: 20-37.
- 山本清文・中村浩也・武内麻美, 2016, 「ソチオリンピックにおける新聞報道の分析(2) —競技種目別に注目して—」『花園大学文学部研究紀要』48: 27-41.